チョコレートキャッスル　小さな演劇祭☆第４回SFフェス参加作品

夜中の
背脂濃厚こってり
味噌ラーメン大盛り
野菜カラメマシマシ
ニンニクは抜きで
（半ライス付き）

決定稿

人物

示野正熙（30）（31）（50）	武蔵小杉にある「ラーメン示野」店主	
渡利健朔（30）（31）（50）	株式会社ミステラレン営業	
鴨志田悠里（27）（46）	ウジテレビアナウンサー	
沼田伊吹（36）（55）	お笑いコンビ「味噌ラーメンズ」ツッコミ	
渡利聖夜（21）（40）	渡利の妹。	

☆舞台美術

簡素な幟（ラーメン示野のものとラーメン悠里のもの各１種）
テーブル（２脚）
いす（３脚）
厨房の台（長机でも可）

○ラーメン示野（平成90年）

示野正熙（30）がカウンターでテレビを見ている。
渡利健朔（30）が無心でラーメンをすすっている。
テレビでは深夜のバラエティが流れている。
鴨志田悠里（27）と沼田伊吹（36）が番組で対談している。

悠里　「お笑いコンビ『味噌ラーメンズ』の飛田さんが起こした暴行事件について相方の沼田さんは」

沼田　「あの事件は、本当にあいつがあほだったんですよ。それでめちゃくちゃおれにバッシング来てね。なんでだよ！　って感じでしたわ、マジで。だって意味分かんないでしょ！　相方の事件でおれが責められるの！」

悠里　「解散か、なんていう声も聞かれますが」

沼田　「いや、え？　そんな声出てますの？　解散なんて、そんな大袈裟なことじゃあないですよ」

示野　「この人も大変でしたねえ。相方のために泥被って。でも、優しそうな人だから、こうは言っても結局許しちゃうんでしょうねえ」

示野、外に出て
沼田、無心で食べている。

沼田　「あいつが戻ってきたら、お帰りって言ってやるのが相方の役目だと思うんで。あいつの港は用意しておかなくっちゃねって思うわけですよ」

悠里　「なるほど」

沼田、悠里、ハケる。

示野　「ほら」

渡利、どんぶりごと持ち上げ汁まで飲み干す。
示野、少し驚いた感じで見ている。

渡利　「ごちそうさまでした。とっても、美味しかった」

示野　「お粗末様です」

渡利　「生き返りました」
示野　「軒先で倒れているときは何事かと思いました」
渡利　「すみません、完全に酔い潰れていました。最近の心労疲労も祟ったんだと思います」
示野　「体は大事です」
渡利　「示野さんのラーメンは、不思議です。すっかり元気になった感じがします」
示野　「ま、酒の〆に示野のラーメン、でやっていますからな。ははは」
渡利　「……はあ」
示野　「北海道産の大豆100％の味噌を使ってるんですよ」
渡利　「酒に味噌汁、染み渡りますもんねえ」
示野　「味噌ラーメンですけれどね」
渡利　「ね」
示野　「まあ、近々締めるつもりなんですけどね」
渡利　「示野だけに？」
示野　「いや、それは」
渡利　「え、締めるって？」
示野　「畳みます。店じまいです」
渡利　「あ、畳屋さんになる？」
示野　「ならないです」
渡利　「え、じゃあ何屋さんに。え、鮨屋？」
示野　「言っておりません。まだ考えていないのです」
渡利　「そうですか。美味しいのに、もったいないですね」
示野　「美味しいですか」
渡利　「美味しいですよ。はい、ええ、そりゃもう、はい！　めちゃ美味かったなあ！　なんっか、すっげえ、元気出てきたし！　美味かったなあ」
示野　「嘘みたいに思えてきました」
渡利　「いや、本当に美味しかったですよ。その……儲かっていないんですか」
示野　「実はそうなんです」

鳩時計が鳴る。カッコウ、カッコウ。

渡利　「わあ！　郭公！　あ、閑古鳥。ぷぷぷ」
示野　「（時計を指して）４時なんです！」

渡利　「（笑って）閑古鳥が鳴く時計ですか」
示野　「骨董屋の店主には、50年物の鳩時計、と言われて買ったのですが。とんだ代物をつかまされた気がします」
渡利　「ぷぷぷ、閑古鳥が、ぷぷぷ、鳴いていますからね」
示野　「妙に優しい鳴き声でねえ。捨てるに捨てられなくなってしまったんです」
渡利　「そんなもんでしょうか」
示野　「そんなもんです」
渡利　「はあ。あ、すみません。食べ終わったのに長々と」
示野　「いえいえとんでもない。どうせ（時計を指して）閑古鳥が鳴いていますから」
渡利　「そんな自虐的にならなくても」

示野、丼を下げながら

示野　「おお、汁まで全部飲んでいただいて、作った甲斐があります」
渡利　「いえいえ、美味しかったからです。煮卵に、半ライス、野菜カラメのマシマシまでサービスしていただいてこちらこそありがたい」

渡利、帰ろうとする。

渡利　「じゃあ、（財布からお金を出して）千円で。お釣りはいりません」
示野　「え、それは」
渡利　「あ、それと示野さん」
示野　「はい」
渡利　「ラーメン、諦めるんですか？」
示野　「え」
渡利　「ラーメン、辞めちゃうんですか？」
示野　「……」
渡利　「未練はあるんですね」
示野　「なんですか」

渡利、名刺を出して

渡利　「申し遅れました。わたくし、株式会社ミステラレンの、渡利健朔と申します」

示野、名刺を受け取り

示野　「ミステラレンって、あの、ですか？」

渡利　「はい。日本を代表する秘密道具メーカーであり、グルメでもお馴染みの、あのミステラレンです」

示野　「ミステラレンの方……」

渡利　「はい。見捨てられんのです」

示野　「わあ。あ、あ、あ、あ！　わたしこの間、御社のスモールライト買いましたよ」

示野、スモールライトを持って来る。

示野　「ほら、これです。ビッグライトも買いたかったんですが、高くてねえ」

渡利　「ああ、そうなんですか。ビッグライトと一緒にお買い上げいただければ15％OFFにて」

示野、スモールライトを点けて渡利に向ける。

渡利　「（光を避けて）あああ！　小っちゃくなっちゃう、小っちゃくなっちゃう。（スモールライトの電源を落とし）これ以上小顔にしてどうするんですか！」

示野　「すみません。そういえば今度、タイムマシンが出るんですよね」

渡利　「はい、2～3年後をめどに」

示野　「いいですねえ。ついに、時空を移動できる時代が来ましたねえ」

渡利　「はい。弊社の目下の一大プロジェクトです」

示野　「それはそうと……（渡利の名刺を見る）」

渡利　「ああ、そうでした。助けていただいたお礼に、これを差し上げようと思って」

渡利、鞄から「シメダシ」を出す。

渡利　「（ドラえもんのように）シメダシ」

示野　「え？」

渡利　「シメダシです」

示野　「シメダシ」
渡利　「出汁です」
示野　「ダシ！？　それも秘密道具なんですか」
渡利　「はい。ただ、試供品です。まだ市販はしておりません。が」
示野　「が？」
渡利　「勝手ながら今の示野さんには、とても有効なものかと」
示野　「……頂いていいんですか？」
渡利　「もちろんです」
示野　「どんな効き目があるんですか」
渡利　「お客さんが、たくさん来ると思います」
示野　「すごい出汁ですね」
渡利　「一滴で十分です。一杯に一滴垂らせば、お客さんは虜になると思いますよ」
示野　「な、なるほど。う～ん、でもなあ（難しい表情）」

渡利、示野の矜持を察して

渡利　「ああ、もちろん使う使わないは示野さんにお任せします」
示野　「はあ」
渡利　「それでは、今度こそ本当に失礼します」

渡利、去る。

示野　「出汁、ありがとうございます」

渡利、戻って来て

渡利　「あ、そうそう」
示野　「戻ってきた！」
渡利　「示野さんはその出汁、一度しか味わってはいけませんよ」
示野　「え」
渡利　「いいですか、決して、二度は味わってはいけません。言いましたよ」
示野　「どうして」
渡利　「どうしてもです。では、失礼します。お休みなさい」

渡利、去る。
示野、ぽかん。腹が鳴る。

示野　「お腹空きました。せっかくですし、これでラーメン、作りますか。まあ、ダメで元々です」

示野、ラーメンを作る。

示野　「一滴」

シメダシを一滴垂らす。

示野　「ふむ」

示野、丼を持って席に着く。

示野　「いただきます」

示野、ラーメンを食べる。

示野　「ん？　特に味は、変わりませんねえ。いつも通りな感じがします。本当にこれを出せばお客さんが来るんでしょうか」

暗転

○ラーメン示野（平成91年）

マイクを持った鴨志田悠里（27）がラーメン示野を取材している。
示野（31）は忙しそうにラーメンを作っている。

悠里　「こんにちユウリ！　ウジテレビアナウンサーの鴨志田悠里です！　わたしは今、こちらＪＲ武蔵小杉駅の東口から徒歩10分ほどの裏通りにあります、ラーメン示野に来ております。見てください、平日の昼間なのに、行列ができています。厨房では店主の示野さんが、……はっイケメン！　タイプ！　さすがはラーメン屋です。示野さん！　大盛況ですね」

示野　「はい。お陰様で、連日好評をいただいています。ありがたい限りです。〆のラーメンじゃなくなっちゃいましたけどね」
悠里　「（遮って）食べている方に聞いてみたいと思います！」

悠里、客の渡利聖夜（21）にインタビュー。

悠里　「どれくらい並びましたか？」
聖夜　「（食べるのを止めて）え？　まあ1時間弱やね」
悠里　「お、関西からですか？」
聖夜　「え？　そこ、そこ」
悠里　「どちらですか？」
聖夜　「新川崎」
悠里　「（舌打ち）近っか」

悠里　「なんと、遥々寝屋川から来たそうです」
聖夜　「あ！　でっちあげだ！」
悠里　「寝屋川からだと、朝早かったんじゃないですかあ～？」
聖夜　「だから寝屋川じゃないって」
悠里　「大阪ですもんねえええ！　遠いわあ、そら遠いわぁ」
聖夜　「だから大阪じゃねえ。か・わ・さ・き。か・な・が・わ」
悠里　「そらやっぱり、このラーメンが目当てですか？」
聖夜　「え？　いや、別になんとなく歩いてて、ただ味噌ラーメンが好きだったからで。この店有名なの？」
悠里　「（大いなるため息）」

悠里、色んな人に「ラーメンどうですか？」と聞いて回る。
「ラーメンどうですか？」「おいしい」

聖夜　「なんだあのアナウンサー」

聖夜、食べ続ける。

悠里　「皆さん美味しいと！　素晴らしいことです！　美味しい祭りです。ワッショイ！」
聖夜　「そんな祭りはない！」
示野　「お待たせしました」

示野がラーメンを運んでくる。
悠里、席に着いて

悠里　「わ～、来た～」
示野　「示野特製、示野ラーメンです。。〆じゃなくなっちゃい」
悠里　「いただきまーす」

悠里、かきこむ。

悠里　「あっちあっち！！（噎せる）」
聖夜　「でしょうねえ」

示野、慌てて水を持って来る。

示野　「お水飲んでください！」
悠里　「（受け取って）ありがとうございます」

このとき、悠里の手が示野の手に触れて

悠里　「あっ、待って」

悠里、なぜか示野の手を掴む。

聖夜　「なぜ掴む」
示野　「ええと」

悠里、なぜか示野の手をさする。

聖夜　「なぜ擦る」
悠里　「あんっ」
聖夜　「なぜあんたが感じる」
示野　「（悠里の手を見て）あ、あ、あ、結構手ぇ綺麗ですね」
悠里　「だ、誰が結婚適齢じゃ！」
聖夜　「言ってない」
悠里　「はっ。すみません。27歳の本音が口から出ちゃいました。テヘ、

いっけね。出ちゃったので、代わりにラーメンを口に入れます」

悠里、ラーメンを食べる。

示野　「いかがですか？」
悠里　「うん！　味噌の味が濃厚で、コクがあるのにまろやかです。絶品です。あと、すごく熱いですね」
聖夜　「猫舌じゃん」
示野　「（別の客に）あ、どうも、ありがとうございました。是非また。（外の客に）お次1名様中へどうぞ」

沼田伊吹（36）が入って来る。

沼田　「やっとだー！」

悠里、沼田を見て

悠里　「！　沼田さん」
聖夜　『味噌ラーメンズ』沼田！」
沼田　「げ！　鴨志田ちゃんじゃん。なにしてんの？　婚活？」
聖夜　「なんだこいつ、全然おもしろくくないぞ」
悠里　「アホですか。ラーメン屋でするわけないでしょう。あとそういうの、セクハラですよ」
沼田　「へいへい」
悠里　「そういう沼田さんは？」
沼田　「今日はオフ。完全プライベート。あ、解決ラーメンひとつ」
示野　「はい、解決ですね」
聖夜　「解決ラーメン？」

悠里、急に立ち上がり

悠里　「そうです！　ここのお店の味噌ラーメンは、通称『解決ラーメン』」
聖夜　「どうして？」
沼田　「その名の通りさ」

声　「告白しようかめっちゃ悩んでたんですけど、解決ラーメン食って

コクったら、上手くいきました」
声　「上司のパワハラを誰にも相談できずにずっと悩んでたんですけど、解決ラーメン食べた次の日になんか勇気が湧いて、先輩に打ち明けられました」
声　「ＥＵ離脱すべきか悩みマシたが、解決ラーメン食べて、離脱決めマシた」
声　「性別適合手術に踏み切れた」
声　「会社辞めた」
声　「大阪の万博招致、うまくいったわ～」

沼田　「そう言うわけさ」
聖夜　「マジ！？　悩み解決しちゃうの！？」
悠里　「そうなんです！　美味しいのはもちろん、解決したい悩みを抱えたお客さんで連日超満員なのです！　解決ラーメンで、ガッチリ。現場からは以上です」

示野、沼田にラーメンを運んでくる。

示野　「お待たせしました。解決ラーメンです」
沼田　「お、きたきた」
悠里　「沼田さんも、悩みがおありで？　やっぱり、飛田さんの件？」
沼田　「ふっ、だからおれは悩んじゃいないって。あいつの帰りを待つだけ。悩んでなんかないの。単純にここのラーメンが美味いから食べに来たんだ。それだけさ」
悠里　「ふうん」
沼田　「いただきます。（食べる）あっつ！（噎せる）」

暗転

○ラーメン示野（時間が経過している）

示野は笑顔でラーメンを作り続けている。
ラーメンに一滴ずつシメダシを掛けてゆく。
深夜のバラエティ。沼田と悠里。

沼田　「なんと、今日で、鴨志田ちゃん番組卒業！　最後です。長年お疲

れ様でした」

悠里　「はい、こんにちユウリ〜。番組をご覧の皆さん、ウジテレビの鴨志田悠里です。今沼田さんからもお知らせしていただいた通り、今日が最後になります。番組開始当初から、本当にお世話になりました。そして、えー、これはこの番組で初めて言うのですが」

沼田　「なになに？　まさかついに結婚とか〜？」

悠里　「はい」

沼田　「え」

悠里　「来月結婚します」

沼田　「え」

悠里　「そして結婚を持ちまして、ウジテレビを退社します」

沼田　「えええええ！」

悠里　「わたくし鴨志田悠里、結婚して、お嫁さんになります」

沼田　「えええええ！」

示野、顔を上げて

示野　「おや。いつぞやの鴨志田さん。おめでとうございます」

悠里、去る。

×　×　×

沼田、テレビに現れる（先ほどまでとは別の番組）。

沼田　「この度、我々『味噌ラーメンズ』は、解散することにしました。今までお世話になりました。これまで支えて下さった皆さま、飛田の復帰を信じて下さった皆さまには感謝と申し訳なさでいっぱいです。おれもずっと悩んでいたのですが、でも、これ以外の結論はやっぱり考えられませんでした。もちろん悔しいのはあるんですけれど、どこか、安堵している自分もいます」

沼田、礼をして去る。

示野　「沼田さん……。そうか、帰りを待っているって仰っていたが、言っていることが全てではありませんものね……」

×　×　×

平成110年。
年老いた示野（50）、イスに座る。
テーブルには、丼が置かれている。
手にはシメダシを持っている。
もう残りがとても少ない。ほぼ空。

示野　「数年前にもらったこのシメダシも、もうほとんど空です。これでお客様が増える、と仰っていた渡利さんは正しかったんですね」

渡利（50）、黙って見ている。

示野　「しかし、わたしは如何せん疲れました。来る日も来る日も、毎日ラーメンを作り、お客様に喜んでいただく。とても嬉しいことです。毎日が満ち足りた気分です。お客様が『美味しかった』『また来たよ』って笑顔を見せてくれることに代えられるものなんてありません。あの日、店を畳まずに本当に良かった。シメダシのお陰です。渡利さんの陰です。ラーメンを作っていて、本当に良かった」

渡利　「違う」

示野　「シメダシは直に無くなってしまいます。そうなったら、もう今のようにはお客様がいらっしゃらないかもしれませんね」

渡利　「違うんだ、示野さん」

示野　「それは寂しいことです。渡利さんには止められましたが、一杯だけ、無くなってしまう前にもう一杯だけ、自分自身のラーメンを食べても、そんなに罰は当たらないでしょう？」

渡利　「やめるんだ」

示野　「ここまで頑張ってきた、ちょっとしたご褒美です。どうか大目に見てくださいな」

示野、丼にシメダシを一滴垂らす。

渡利　「示野さん、やめるんだ」

示野　「いただきます」

渡利　「食べちゃダメだ！」

示野、食べる。
暗転

○ラーメン悠里（平成110年）

ラーメン示野と似た内観。
壁に「無料トッピング」の張り紙。
扉が開く。
悠里（46）ら夫妻が切り盛りしているラーメン屋。
沼田（55）が一人で食べている。

沼田　「（食べ終わって）ごちそうさん」
悠里　「はい、お粗末様」
沼田　「繁盛してんじゃん」
悠里　「まあまあですね」
沼田　「ふ。しかし局アナが引退してラーメン屋とはねえ」
悠里　「ね、わたしもビックリです。人生何があるか分かんないですね」
沼田　「なんでラーメン屋？」
悠里　「ああ。解決ラーメンって覚えてます？」
沼田　「ああ、あったなあ。偉く繁盛してたね」
悠里　「1年ちょっと前、急に閉店しちゃって」
沼田　「そうなんだ」
悠里　「そうなんです。でもね、あの店、そのことも含めて実はけっこう伝説的なラーメン屋だったらしく」
沼田　「あるよね、急に辞めて伝説化する現象」
悠里　「主人も、ラーメン屋やりたいな〜ってなんとなく思ってるときに、偶々あのラーメン食べたんですって」
沼田　「うわ、解決しちゃったじゃん」
悠里　「そうそう。そうなんですよ」
沼田　「すごいね、解決ラーメン」
悠里　「わたしの結婚も、実は解決ラーメンのお導きなんじゃないかって」
沼田　「まさか。おれはなんも解決してもらってないぞ」
悠里　「願う心が弱いんですよ、沼田さんは」

渡利（50）と聖夜（40）が入って来る。

悠里　「いらっしゃいませ」
聖夜　「あれ」
渡利　「違うねえ」
沼田　「あ、じゃあ、おれはそろそろ」
悠里　「ありがとうございます。またいつでも来てください」

沼田、去る。

悠里　「すぐ片付けますから」

悠里、片づける。
適当なタイミングで、渡利と聖夜は座る。

渡利　「ああ、どうもお構いなく」
聖夜　「あ（悠里を指して）」
悠里　「？」
聖夜　「寝屋川の人！」
悠里　「え？　わたし？　全然寝屋川じゃないよ」
渡利　「何言ってんだおまえ。すいませんね、急に」
聖夜　「寝屋川のアナウンサー」
渡利　「アナウンサー？　ラーメン屋だろ」
悠里　「アナウンサーでしたよ」
渡利　「え」
聖夜　「ほら！　わたし一回会ったし」
悠里　「え、ホント？」
聖夜　「うん、ここで」
渡利　「ここ？」
聖夜　「つまり、ラーメン示野で」
悠里　「示野さんには、わたし一回インタビューしに行った」
聖夜　「もうなくなっちゃったんですねえ」
悠里　「そうなんです。1年ちょっと前に」
聖夜　「（合点がいって）それで」
悠里　「はい。わたしと主人がここで開業しました。ラーメンの、思い出の地でもあるので」

渡利　「どうして？」
悠里　「え？　や、わたしも主人も解決ラーメン食べて」
渡利　「じゃなくて、示野さん、どうして辞めちゃったんですか」
悠里　「ええ、それは分かんないですよ。面識があるわけじゃ。あ、お客さんもしかして、知らずに解決ラーメンを食べに来た感じですか」
渡利　「まあ。会いに来たんです、久しぶりに」
悠里　「示野さんに？」
聖夜　「元女子アナ、聞いて驚くな。この兄貴はな、なんと解決ラーメンの本当の生みの親」

渡利、聖夜の口を押えて

渡利　「こらこらこら、何を言うんだ」
聖夜　「んんんんんん～～」

扉が開く。
示野（50）がスーツ姿で入って来る。

悠里　「いらっしゃいませ」
示野　「ああ、懐かしい」

悠里、聖夜、渡利、「あ」という感じで示野を見る。

悠里　「ああ、どうぞ、空いてるお席。あ、お二人、トッピングは？」

悠里、トッピングの張り紙を指す。
示野、席に着く

悠里　「あれ全部タダ」
聖夜　「すごい！」
渡利　「じゃあ、野菜アブラニンニクカラメ生姜に、カラアゲ別皿で」
悠里　「はい」
聖夜　「じゃあわたしもそれで」
悠里　「はいよ～。お客さんご注文はいかがいたしますか」
示野　「背脂濃厚こってり味噌ラーメン大盛り、お願いします」
悠里　「ありがとうございます。味噌大１（厨房に引っ込む）」

渡利　「あの」
示野　「はい？」
渡利　「20年程前に」
示野　「はい」
渡利　「……いえ、なんでもありません」
示野　「20年前といえば」
渡利　「はい」
示野　「わたしが、ラーメン屋を辞めようと思ったときくらいですね」
悠里　「あら、お客さんもラーメン屋さんですか？」
示野　「いえ、今はもう辞めています」
悠里　「まあ、どうしてですか」
示野　「う～ん」
悠里　「不入りですか？」
示野　「これが、ありがたいことに、そこそこお客さんの評判は良かったのです」
悠里　「ますます不思議」
示野　「出汁を。出汁を作れなくなってしまったんです」
悠里　「え」
示野　「ある朝いつものようにスープを仕込もうと思っていたら、急に、全ての力が抜けてしまいました。味噌を溶くのも、がらや野菜を煮込むのも、濾すのも……なぜか、有体に言えば、やる気が全く起きなくなってしまったんです」
聖夜　「うわあ、なんでなんで」
示野　「なんでなんでしょうかね。理由が分からないんです」
悠里　「ラーメン屋として、怖い話」
示野　「強いて言えば」
悠里　「強いて言えば？」
示野　「わたしが禁忌を犯したからかもしれません」
聖夜　「禁忌？」
示野　「はい。一度だけ、と言われたものに手を出してしまったんです」
聖夜　「え？」
示野　「もともと、あのラーメンはわたしの実力ではなかったんです。自分の力でラーメンを作れないでやっていることへの罪の意識はありました。ずっとずっと。その罪悪への、罰だったんでしょうね（笑って）すみません、何のことか分かりませんよね。すみません、つ

まらぬ話を」

悠里、ラーメンを２つ持って来て

悠里　「お先に、味噌普通２つです（置く）」
聖夜　「アリガトゴザマス～」

悠里、厨房に戻る。

示野　「どうぞ、召し上がってください」
聖夜　「じゃあ、お先に」
渡利　「シメダシは」
示野　「え」
渡利　「独り言です、気にしないでください」
聖夜　「お兄ちゃん？　食べないの？」
渡利　「シメダシは、悩みを解決する出汁じゃないんです。心を占めていることを締め出す。そういう出汁なんです」
示野　「あなたは」
渡利　「（遮って）心を悩みが占めていれば、その悩みを解決するという形で締め出すんでしょう。でも、そのとき心を満足感が占めていれば、その満足感そのものを締め出してしまうこともある。融通が利かないんですよ、締め出し方は」

示野、大きく謝罪をして

示野　「申し訳ありませんでした。あなたが、一度だけと釘を刺したのにもかかわらず」
渡利　「昔のことです。忘れました」
示野　「このことはどう謝っていいものか。あなたの恩義に、背いてしまいました。（土下座をして）どうか、どうか」
渡利　「（慌てて制止し）やめましょう。そういうことではないんです。ただわたしは、真相をお伝えしたかっただけで」

悠里、厨房から顔を覗かせて

悠里　「味噌大のお客様、トッピングは」

示野　「すみませんでした！」
悠里　「えええ！？」
示野　「あっ、ああ、失敬。ええと」
悠里　「あ、あ、あの、トッピングはどうしましょう？　あれ、あれ（張り紙を指す）」
示野　「（張り紙を見て）ああ。では……野菜カラメマシマシニンニクは抜きでお願いします」
聖夜　「ニンニクが美味いんじゃん」
悠里　「はい、野菜カラメマシマシニンニク抜きですね」
示野　「はい」

悠里、ラーメンと半ライスを持って来る。

悠里　「お待たせしました。味噌大です。あと半ライス」
示野　「いえ、半ライスは」
悠里　「さっき恩義なんて言葉が聞こえてきましたけど。これはわたしからの、お礼です。こんなちょっとしかお返しできなくて申し訳ないけど」
聖夜　「やっすい恩返しだな」
悠里　「うるさい」
示野　「恩？」
悠里　「はい」
示野　「すみません。わたしはあなたに、何か致しましたでしょうか」
悠里　「あなたのおかげで、いい人に出会えました。結婚できました。ラーメン屋、開けました」
示野　「はあ」
悠里　「ああ、どうぞ、伸びないうちに召し上がってください」
示野　「恐れ入ります。いただきます」

示野、ラーメンを食べる。

示野　「ああ、美味しいですね」
聖夜　「ね。美味いね」

示野、感慨深そうにラーメンを食べている。

渡利　「食べながら聞いてください。独り言を言います」
示野　「え」
渡利　「シメダシは確かに、あなたの『お店を繁盛させたい』という願いを叶えたのでしょう。でも、その効果が20年も続くと思いますか？たしかに悩みを解決するラーメンという評判で、人気を呼んだのでしょう。でもそんな験担ぎみたいな評判だけで20年もラーメン屋をやっていけますか。わたしは、ラーメン屋ではないので断言はできません。ですがあなたが20年かけてたどってきた道は、シメダシのお陰なんかじゃない、あなた自身の人柄と実力だ、と、わたしは思います」
示野　「……ありがとうございます、ありがとう」

TVからニュース番組の音声がする。

TV声　「さあ、遂に明日、ミステラレン社の誇るタイムマシンXが発売。従来の勉強机の引き出し型からデザインを一新、腕時計型やスマートフォン型というポータブルなデザインも」

テレビの中に渡利が映る。

聖夜　「（テレビを見て）お、兄貴の」
渡利　「示野さん」
示野　「（名前バレしていることに苦笑して）はい」
渡利　「一つ聞きたいことがあります」
TV声　「ミステラレン商品開発部長の渡利氏は」
渡利声　「画期的なモデルになったと思います。従来は据え置き型でしかできなかった時空移動が、ついに、どこでもできるようになりましたから」
示野　「なんでしょうか」
渡利　「もう一度ラーメン屋をできるとしたら？」
示野　「え」
渡利　「わたしには、それだけの力があります」

渡利、腕時計（タイムマシンX）を出す。
示野、辺りを見渡す。

悠里　「解決ラーメン、本当に美味しかったですよ」
聖夜　「うん、新川崎から来た甲斐があった」
悠里　「隣じゃん」
聖夜　「でも美味かったもん」
渡利　「わたしは、後悔しているんです。あなたに余計なものを与えてしまったんじゃないかと。あなたの夢を後押しするつもりが、潰してしまったんじゃないかと」
示野　「お言葉、ありがとうございます」

示野、ラーメンを見て、渡利に胸中を語る。
それを聞いて、渡利、頷く。
示野、渡利、ラーメンを食べる。

終わり